

ナイト・ウォッチ / NOCHNOI DOZOR

2006(平成18)年2月14日鑑賞(東宝試写室)



監督・共同脚本=ティムール・ベクマンベトフ/原作=セルゲイ・ルキヤネンコ/出演=コンスタンチン・ハベンスキー/ディマ・マルティノフ/ウラジミール・メニショフ/マリア・ポロシナ/ガリーナ・チューニナ/ヴィクトル・ヴェルズビツキー (20世紀フォックス映画配給/2004年ロシア映画/115分)

第1章

あなたは
何本見た?

……ロシア文学の二大双璧は、トルストイの『戦争と平和』とドストエフスキーの『罪と罰』だが、近時ロシア国内でベストセラーとなっているのが、全く新しいジャンルの小説であるセルゲイ・ルキヤネンコによる『ナイト・ウォッチ』3部作とのこと。これは「光の世界」と「闇の世界」との対立を軸とし、特殊な能力をもった「異種 (アザーズ)」の行動に焦点をあてたもの。それを映画化したこの第1弾は、何と「ロシア興行史上No.1ヒットを記録!」したい。さてロシアはともかく、世界市場においてこの『ナイト・ウォッチ』は、どのような評価に……?

ホントにこれがロシア映画……?

1950年代の「米ソ冷戦」構造は世界的規模の核戦争の危機を伴ったものだったが、結果的にそれは、米ソのリーダーたちの叡知によって回避された。その後、アメリカは順調に「世界の憲兵」としての役割を果たしてきたのに対し、ソ連は「ソ連邦の解体」によって新たにロシア国が成立したものの、その国際的立場は大きく低下し、今や中国にとって代わられつつある。中国は1949年の中華人民共和国建国後、文化大革命によって大きな痛手を受けたが、映画の世界においては1982年の陳凱歌^{チェン・カイコー}監督の『黄色い大地』によって「新生中国映画ここにあり」という姿を示した。しかし、ロシア映画はもうひとつ……?

私が知っているソ連映画の代表は何といても、オードリー・ヘップバーンが

主演したハリウッド版『戦争と平和』(56年)の向こうを張った(?)リュドミラ・サベリーエワ主演の『戦争と平和』(65~67年)。第1部・完結編全7時間5分。そのあまりの壮大さに唖然とさせられたものだった。社会主義国が国策としてつくる映画はそんなものと考えていた私だったが、ロシアでも今や「市場化」がキーワード。そんなロシアにおいて、「ロシアNo.1大ヒット樹立!『マトリックス』を超える映像革命」と宣伝されているこの映画は、そんな「常識」を根底から覆すもので、まさにこの映像は『マトリックス』の世界……。ホントにこれがロシア映画……?

ロシア文学の伝統は……?

ロシア文学の2大双璧は、トルストイの『戦争と平和』とドストエフスキの『罪と罰』だが、その他にもゴーゴリやチェーホフなど、日本人に愛される古典的ロシア文学は多い。さらに私の大好きな映画『ドクトル・ジバゴ』(65年)は、戦後ソ連でノーベル賞作家となったボリス・パステルナークの原作によるもの。パンフレットによれば、そんなロシア文学界において「セルゲイ・ルキヤネンコの小説『Night Watch』と、その続編『Day Watch』および『Dusk Watch』は、ロシア文学において、まったく新しいタイプの読者を開拓した。ファンタジー・ファンやインターネット・ユーザーなどの若い世代である」、とのこと。

この原作3部作のテーマは、「光の世界」と「闇の世界」との対立であり、その中で生きる、人間でありながら特殊な超能力を持つ“異種(アザーズ)”が示す行動。そう言われても、「そりゃ一体ナンのこっちゃ?」と思うことがいっぱいだが、パンフレットにあるとおり、「ナイト・ウォッチ(闇の監視人)」とは光の戦士として闇のアザーズの行動を監視する者であり、逆に「デイ・ウォッチ(光の監視人)」とは闇の戦士として光のアザーズの行動を監視する者とのこと。「ナイト・ウォッチ」と「デイ・ウォッチ」の監視のもとに、光の世界と闇の世界のバランスは1000年もの間平和に保たれていた……。

しかし今映画の舞台は、現代のロシアの首都モスクワ。そこでくり広げられるナイト・ウォッチとデイ・ウォッチそしてアザーズたちの物語は、何とも異様で奇怪なもの……。

若者はやっぱりこういうのが好き……？

この映画がロシアでNo.1ヒットしたのは、物語（原作）の体系的な面白さ（？）のみならず、映像と視覚効果の斬新さにある。その技術的なことは私にはよくわからないが、パンフレットによれば、それは「見るものの既成概念を根底から破壊する——映像世界について」「ハリウッドでは決して描くことができなかった——視覚効果について」と表現されているが、そう言われてみると全くそのとおり。

やっぱり、今ドキの若者はこういうのがお好みなのだろうが、私にはついていくのがしんどいというのが正直なところ。特に私は、腹の中に手を突っ込んだり、背中の肉の中から刀を引きずり出したりという怪奇シーン（？）は、やはりクライ……。映像世界や視覚効果という観点から、そんなにハリウッド映画に張り合わなくてもいいのでは……？

3部作の行方は？

『ナルニア国物語』3部作の『第1章ライオンと魔女』の公開が来る3月4日に迫り、大きな話題を呼んでいる。それと同じように、この『ナイト・ウォッチ／NOCHNOI DOZOR』も全3部作の第1章。パンフレットによれば「すでにフォックス・サーチライトは続編の海外配給権を獲得しており、完結編は英語にて撮影予定」とのこと。主人公のアントンを演ずるコンスタンチン・ハベンスキーやナイト・ウォッチのリーダーであるゲッサーを演ずるウラジミール・メニシヨフは、ロシアでは人気と実力を兼ね備えた役者らしいが、いくらそうであっても日本では、また世界では全く無名の人たち。

しかし、この映画が描く映像世界や視覚効果がハリウッドを凌ぐということが、ロシアの若者だけではなく日本の若者にも認められ、さらに中国の若者たちにも同様になれば話は別。さらに第1部・第2部がある程度世界に広まり、第3部がホントに英語で撮影されることになれば、世界的に大ヒットする可能性も……。さて、その可能性をあなたはどう見る……？

2006(平成18)年2月15日記